

剣風



事務局 〒330-0074
さいたま市浦和区北浦和5-6-5
浦和合同庁舎4階
Tel (048)834-8869
Fax (048)834-8879
<http://www.saitama-kendo.or.jp>
(編集責任者 川合育三)

第17号 令和3(2021)年3月1日発行

(題字 元会長 野澤 治雄)



100年後の未来へ

埼玉県立武道館長 羽鳥 利明
(埼玉県スポーツ協会副会長)

2020年1月「国内初の新型コロナウイルス感染者発生」の報道があるや瞬く間に世界中に拡散したこのウイルスは、今日に至っても終息の道筋が見えない状況にあります。

巷では、「100年前のスペイン風邪」に似ているとか「100年に一度」など「100年」という言葉がこれほど使われたことはないのではないのでしょうか。ちなみに、日本におけるスペイン風邪では、当時の人口5500万人のうち、2380万人が感染し39万人が命を落としたと記録されております。

スポーツ界に目を向けると、100年前の1920年(大正9年)第7回アントワープオリンピック大会で、テニスシングルスで熊谷一弥氏が、同ダブルスで熊谷・柏尾誠一郎組が銀メダルを獲得の記録があります。

我が国の武道は、100余年前の1895年(明治28年)武道の振興・奨励・顕彰を目的に創設された「大日本武徳会」にその源を見ることができます。(大日本武徳会は1946年に解散)また、1909年(明治42年)には、本県武道の象徴となる「武徳殿」(現県庁第二庁舎北側)が建設され、その後、武道関係の皆様のご尽力により同所に県立武道館が建設され、本県武道の中核として親しまれてきました。現武道館は、第59回彩の国まごころ国体に合せ一層の武道振興を目指して、上尾市に移転新設されました。このように、本県武道の殿堂は先達の知恵と努力で築き上げられており、今を生きる私たちには、新たな歴史を刻む使命が託されていると思います。

武道やスポーツには、社会を元気にする大きな力があります。

次代を担う子供たちを待っているのは、少子高齢社会、AIなど情報通信技術の急激な進歩、そして何より、武道・スポーツに取り組む人口減少への対応ではないかと思えます。私たちは、子供たちが男女を問わず、武道やスポーツを通じて体を動かし、生涯スポーツ・競技スポーツの分野で活躍し、或いは、選手として高度な技と勇ましい姿、お互いを認め合うスポーツ精神の醸成など、夢と感動を与えてくれる人材育成に取り組み100年後の未来に夢を託す必要があります。過去は変えられませんが、未来を作り出すことは可能です。

関係者が武道・スポーツ人を通して、新型コロナウイルスをはじめとする様々な困難に立ち向かい、人々に勇気と感動を与えることにより、世界中に元気を取り戻すことを願ってやみません。

結びに、公益財団法人埼玉県剣道連盟のますますのご発展をご祈念申し上げます。



表題通り、武道とは何か、武術性とは何か、剣道とは、柔道とは何かを、真正面から論じた一冊。志々田文明氏（早稲田大学名誉教授）大保木輝夫氏（埼玉大学名誉教授、日本武道学会会長）という現代における武道論の両巨頭が編著者となり、両氏の論文はじめ、大学の研究者10氏の論文が収録されている大作。精神論に帰結するのではなく、それがもしあるとすれば何故なのか含め、一貫して科学的に考察される。武道家、体育教諭らにとっては必須の書なのはもちろん、剣道愛好家、武道愛好家にも読んで欲しい一冊だ。

本書は、大きく4部構成。①志々田氏による武道・武術の総論②大保木氏らによる剣道・剣術について③柔術・合気道・柔道について④東アジアの武術文化について。

ここでは、志々田氏による武道・武術総論と、大保木氏の剣道・剣術について紹介したい。

武道あるいは武術については、同書冒頭の「まえがき」から始まって「第1章 武術・武道とサピエンス」にかけて、志々田氏が分かりやすく論じている。

武術は「競争において生き残るために使う道具」として生まれた。「そこには善悪は付着しない。武術を使うものが誰かによって評価されたときに、野蛮なもの、危険なものとして評価されるのだ」「人類の歴史をみれば武術は暴力を意味しない。厳しい環境の中で必死に生き抜く力だった」と、武術の誕生を振り返る。そのうえで、日本武道を代表する剣道、柔道、その前身である剣術、柔術について「剣道の理念」や、加納治五郎氏による「講道館柔道」の理想と原理などを紐解きながら、武道とは何か、武術とは何かを導き出していく。

さらに、武術性とは<生き抜く力>である、との基軸のもと、「しかしそれが相手に向けられたいときには殺傷力として働いた。一方、日本では武術性の殺傷力を否定する精神文化を生み出した。それは人権を生み出した近・現代ではなく、武士の時代に育まれた」と西洋や他のアジア諸国との違いを明確に示した。

大保木氏は、志々田氏の武道、武術の総論を受ける形で、「剣道の武術性を問うー臨機応変の身心」と題し、現代剣道から古流までの豊富な実戦経験と、深い専門知識による渾身の論文。剣道の武術性とは、「人生の様々な局面で『臨機応変』に使える体躯と精神の滋養」であることを、時系列的に説き明かしていく。

幕末から明治期の剣術の極意には、「抜き差しならぬ危機的な対立状況に遭遇した時に『臨機応変』な対処ができる体と心の在り方（身心技法）こそ肝要」との思想があった。戦前までの剣道は、この「臨機応変」の行動学を基軸として、旧制高校などで西洋的スポーツの競技方法を採用して日本的スポーツとして近代化を図りながら発展してきた。

敗戦によって、一時期この「臨機応変」の基軸はGHQによって切り捨てられたが、戦後、「社会に認知されるうる言葉」を得たことで見直される。

「剣道というきわめて特殊な場のなかで「臨機応変」に対応できる能力は、まず心と体の間に生じる動感感覚（気感覚）の覚知と、彼一我の間に生じる時空間こそが運動の中心だという自覚によって身につく。剣道の本質がこの『間』であることは剣道指導者であれば自明のこと。その『気』をコントロールするための学習が剣道」なのだと説く。

「社会に認知されるうる言葉」とは、つまり「間」であり「気」である。特に「気」に関しては、武道・武術のみならず、心理学、人体科学などで研究が進んで大ブレイク、人口に膾炙（かいしゃ）した。

そしてこの「気」こそ「一本」の源だと提示する。柳生宗矩が、「上泉秀剛が提唱した『殺人刀・活人剣』の理念を飛躍的に展開させ、『機を見るころ』つまり臨機応変の滋養こそが剣術稽古の目標だと示した」。これこそが柳生新陰流をして「武士の帝王学ともいべき芸道へと変身させた」と指摘。「身を捨ててこそという戦国武士の精神は、新陰流や一刀流の『十文字勝』『切落』という究極の一刀を身につけることによって受け継がれた」と示す。

その上で、「究極の一刀」こそが実践・芸道・競技という文化的側面を積み上げてきた身体知の歴史を包括して、現在の『見事な一本』へとつながっていると結んだ。

紹介しきれないのが残念だが、他八氏も力作論文揃いで、時間かけてじっくり読んでいただきたい。

通読後に真っ先に浮かんだのは、大保木氏の論文中にも引用がある三島由紀夫著の「葉隠入門」。山本常朝著「葉隠」の魅力を紹介した評論だが、三島の死後50年を経て、なおファンは多い。本書が令和の「葉隠入門」ならぬ、「日本武道入門」の書となることを願いたい。

「我が師を語る」— 剣道範士 茂木光雄先生 —

剣道 教士七段 藤牧 進



私と先生との出会いは、父利雄の狭山警察署より飯能警察署への異動が出会いの契機となりました。昭和30年です。

3年前の昭和27年に、我が国が独立国として剣道解禁となり、いち早く飯能剣友会を創立。埼玉県剣道大会を開催し、県下各方面に呼びかけ、飯能小学校において、戦後初めて親善試合をした。成績は次の通りであった。優勝：秩父市、二位：飯能、三位：狭山市であった。その後も、昭和35年、西部地区剣道の発展を願い、親善試合を提唱。当時八支部の協力を得て、第一回大会を飯能地区で行い、以後毎年、各支部持ち回りで、本年度59回目となった大会を飯能市でおこなう予定となっておりますが、新型コロナウイルスの関連で中止となりましたので、来年、飯能市において第60回大会として開催する予定となっております。

茂木先生を一口で言うなら、非常に優しい人でした。剣道に対しては厳しいが、日常では怒られた記憶はありません。先生は、明治39年1月栃木県佐野市に生まれ、十二歳にして剣道を志し、佐野市金井町の町道場に入門する。当該道場主浅野新太郎先生は、70歳を過ぎた老人でしたが、気骨旺盛、明治維新で官軍に属し、各地に転戦した実戦の勇士で、全身数か所に刀傷があり、裸身の折、時たま刀傷の説明をされる等技よりは精神力を重要視する指導であった。

茂木先生は、大正14年（18才）で、初段合格。大日本武徳会栃木県支部、左野旗川村最初の有段者として、旗川村青年学校剣道教師を委嘱される。昭和2年4月10日埼玉県警察官拝命。埼玉県警察官志望は、剣聖高野佐三郎先生及び小沢愛次郎範士先生の意欲を感じたためです。昭和5年飯能警察署武術指導係を命ぜられ赴任。飯能尚武会を再興し、毎年4月、天覧山下グラウンドに於いて、剣・柔・弓・柔剣術大会「管内町村対抗一町十二ヶ村」を開催。

昭和30年狭山市より飯能移住で、先生との出会いを得て飯能警察署道場で毎週日曜日に先生が指導する稽古会で教えを受ける。

先生の指導は、「構」えを第一に、姿勢、刃筋、手の内、運足と気力の充実を厳しく指導された。手の内稽古で、金槌で丸太に五寸釘を真っすぐに打ち付ける稽古は深く印象に残っています。

剣道の試合は、審判の旗で決まるだけでなく、相手に対して「礼」で勝ち、着装、姿勢、構え、気合で勝って始めて勝ちとなるが口癖で、厳しく指導されました。

警察官になる前に、栃木県の陸上200mの記録保持者であったそうです。そのためか、剣道での運足、足捌きが得意でした。

先生は上背は低いほうでしたが、防具を着けると岩の様でした。ある時稽古で歯が立たず、弟と相談して、体当たりで飛ばすことにして決行したところ、体当たりの瞬間に捌かれて、羽目板に両者ともに体当たりでした。

又、稽古後には、全員道場に正座で黒板に向かって剣道教言、理合いの講義があり、今思うに、真剣に受けておけばと後悔しております。

その後子供の入門が増加し、子供の指導を命ぜられ、その際に、先生より子供の指導心得を伝授されました。

子供指導は宝探しである。各自皆宝を秘めているので探し出すこと。上に習い下に学ぶ気持ちが大切である。喜びの感情は出すが、怒りの感情は出さない。実践して見せる。同時期に一斉に花を咲かそうとしない。指導は植物の育成と同じで、種をまく時期、肥料を施す時期の見極めが大切だ等々思い出したものを列挙しました。

その後、基本稽古から防具着け寸前で、剣道から離れる子供が多数となり、指導未熟は棚に上げ、先生に指導辞退を申し出たところ、先生曰く、剣道指導は鮭の放流と似て、何年後かに何匹が育った川に戻って来るかと同じだから、真剣にどの様にしたら戻って来るか考えてしなさいと諭され現在に至っています。当時よりは現在は多種多様のスポーツがあり、沢山の選択肢の中から剣道を選択させるには、親と子を

納得させる要素の必要性を感じます。

先生に言われた忘れられない一言は、苦勞して七段合格で洋々と報告に行った折に、「先ずはおめでとう。これからは上に横着、下に傲慢な態度は取るな」と言われ、「段に合格しただけで、人間が昇段したと勘違いするな」の言葉は、今でも忘れません。

時には、山稽古と称して、近くの山に竹刀をもって出掛け森の中で素振りです。暗くなりかけた帰り道では山道で迷い、暗闇の中では下りでなく上に登り、尾根に出れば道は明るく方向確認ができると、危機管理を伝え、剣道を通じ日常生活の知恵までも指導していただいた気がいたします。

時代とともに剣道機運も高まり、各地で運動会も盛んで、ある年の連合運動会で、剣道のデモンストレーションで剣道形を行うことになり、当時はまだ模擬刀はなく、先生は刀剣の収集にも熱心で手持ちの刀の中から、長さ、反りが形に向いた真剣で行うことになり、互いに傷つくと大変だから兄弟で行えと言われ、怖いもの知らずで真剣で形を打ち、場所は広い校庭で間合いが解らずに苦勞しましたが、この経験が後々非常に役に立ち先生に感謝を伝えました。

先生は日常生活の中に剣道をどう生かすかを常に考え取り入れた人でした。

指導の中では、よく、難しい剣道用語を解り易く物に例えて説明するのが得意でした。例えば、小さなカマキリが、足をしっかり踏ん張って鎌を構えると、一瞬大きな犬でも後ろに退く、カマキリの気迫の構えが大切である。後日、実物に出会うと先生の日常の行動の中の第一に、剣道の観察眼を置いた生活であったかが改めて感じます。

遠い道をたどりながら先生の恩を感じつつ書きましたが、先生に対しての残心が少しでも伝わり、茂木光雄先生の存在を少しでも知って戴ければ幸いです。

なお、茂木先生のお孫さんに当たる茂木孝雄剣道教士七段は、永年、飯能警察署の嘱託教師として活動するとともに、埼玉県剣道連盟飯能支部の理事として西部地区の剣道発展のために中核として活動している。



「青少年指導実践事例」

立教新座剣道部 ～いつも通り～

剣道部顧問 原 義克

1960（昭和35）年、立教高等学校は池袋から北足立郡新座町（現新座市）に移転しました。立教学院は「高等学校を中学校の延長としてではなく、大学の前期と考えたと思われる」と記録に残っています。2000（平成12）年、新たに中学校を開設すると同時に校名を、「立教新座中学校・高等学校」と変更しました。2020（令和2）年高等学校剣道部創部65周年、中学校剣道部創部20周年を迎えました。

普段の稽古時間は約1時間30分。特別な稽古項目はありません。基本を大切に、一つ一つの内容の質を高めていくこと。自主的に考えて行動できることを常に確認し合っています。

私たちが、日々心がけているところは「構え・元立ち・受けっぱなし」を各自で見直すことです。

「構え」

自身の構えを持って構える。姿勢・足幅、方向・握り・剣先の高さ・目付そして左手の修まりどころ。

「元立ち（基本稽古から）」

自ら先に発声し構える・間合い・隙の与えかたから足捌き（無駄な動きをしない、左踵）そして相手を引き立てる。

「受けっぱなしにならない」

体捌き、足捌き、竹刀捌きで攻防する。受けたら打つ（応じ技につなげる）相手打突の尽きたところは攻める。

稽古時間、練習試合の回数も強豪校と比べると、かなり少ないと思います。土曜日は授業があります。また、試験前は1週間前から活動休止ですので、外に出向く機会が限られてきます。そのなか、稽古では短時間に集中力を切らずに、始めから終わりまで流れをつくり、よどみなくできるようにしています。また、本校の最大の特徴でもある、大学生との交流です。同キャンパス内に立教大学体育会剣道部が活動しています。高校生は毎週、大学稽古に参加できます。長期休みになると大学生が、中高の道場に来て稽古してくれます。そして、毎月、学院全体の稽古会があり、OBを中心に年配の方から若手までの稽古に参加させていただいています。これらのことが、稽古の質を高めることに大きな影響を与えてくれています。



剣道場落成記念 OB 稽古会2010（平成22）年

同年代で練習試合等を通して経験することは、生徒にとってたいへん重要です。「足りない」ではなく、与えられた環境を最大限に生かして、稽古・試合・学校生活に取り組んで結果を出していきたいと考えています。

稽古も試合も「いつも通り」、「強くしなやかな個性を持った生徒」と歩んでゆきます。

高等学校 試合結果 (2015年度～)

インターハイ

団体戦 (2018 2019)

個人戦 (2016 2017-2名 2018 2019)

関東大会

団体戦 (2015 2016-5位 2017-5位 2018-2位)

個人戦 (2015 2016-5位 2017-2名 2018 2019)

全国選抜大会 (2015 2017 2019)

埼玉県剣道大会優勝 (2017 2020)



令和2年度 学校総合体育大会
Aブロック優勝 3年生チーム

令和2年後期大会記録

◇学校総合体育大会中学校剣道 (11月4、5日=県武道館)

▽男子団体 ①本庄一 (石関・佐怒賀・若林直・若林拓・堤) ②久喜菖蒲 ③朝霞二

▽同個人 ①堤大馨 (本庄一) ②小池 (城北埼玉) ③大島 (鴻巣赤見台) ③柏原 (同)

▽女子団体 ①春日部大沼 (松井・伊東董・貝山・伊東葵・中嶋) ②本庄一 ③朝霞二

▽同個人 ①伊東董 (春日部大沼) ②柳 (北本) ③中村 (本庄一) ③伊東葵 (春日部大沼)

◇学校総合体育大会高校剣道 (8月18、19日=県武道館)

▽男子団体Aブロック ①立教新座 ②川越東 ▽同Bブロック ①大宮東 ②市立川口

▽同Cブロック ①本庄一 ②所沢北 ▽同Dブロック ①川越 ②埼玉栄

▽同Eブロック ①春日部 ②秩父農工科 ▽同Fブロック ①蕨 ②不動岡

▽同Gブロック ①松山 ②山村学園 ▽同Hブロック ①城北埼玉 ②川口北

▽女子団体Aブロック ①星野 ②寄居城北 ▽同Bブロック ①昌平 ②山村国際

▽同Cブロック ①埼玉栄 ②坂戸西 ▽同Dブロック ①坂戸 ②秋草学園

▽同Eブロック ①本庄一 ②川越女 ▽同Fブロック ①ふじみ野 ②熊谷女

▽同Gブロック ①淑徳与野 ②伊奈学園 ▽同Hブロック ①市立川口 ②東農大三

◇県剣道大会高校の部 (11月22日=県武道館)

▽男子個人 ①岡本錬真 (立教新座) ②林 (本庄一) ③森 (熊谷) ③金田 (埼玉栄)

▽女子個人 ①矢坂麗 (淑徳与野) ②平岡 (本庄一) ③岡本 (市立川口) ③岩本 (本庄一)

◇令和2年度埼玉県剣道選手権兼全日本選手権県予選 (2月7日・県武道館)

①橋本桂一 (東松山) ②竹越充 (川口) ③泉和毅 (高校) ③長峰龍汰 (東松山)

◇令和2年度埼玉県女子剣道選手権兼全日本女子剣道選手権県予選 (2月7日・県武道館)

①小川真英 ②山村貴恵 ③志藤綾子 ③荒井貴子

※白抜き数字は全日本選手権出場

◇第69回全日本都道府県対抗県予選 (2月7日・県武道館)

▽次鋒 ①井上賢生 (大学) ▽五将 関末悠介 (東松山) ▽中堅 佐々木優人 (朝霞)

▽副将 橋本桂一 (東松山) ▽大将 森田智裕 (高校)



東松山剣道連盟

会 長 柳 克実／事務局 長峰 一雄

一剣以興國 (いっけんをもってくにをおこす)



「一剣以興國」は、平成12年、第50回松山地区剣道大会を記念し、東松山市にある箭弓稲荷神社に奉納した碑文であります。この言葉には、剣道修行で培った人間力が日本を造る力となり、ひいては人類の平和繁栄に寄与する力となって欲しいという願いが込められています。

当連盟の現在は、加盟23団体（一般12、中体連8、高体連3）で組織され、570人の会員が稽古に励んでいます。

その起源は、昭和27年10月「埼玉県剣道・撓（しない）競技連盟」の発足に伴い、伊田栄三郎氏と戸根川孝一氏を理事として選出したことから始まります。以降、昭和28年12月に前身団体であった「比企郡撓競技連盟」を「松山地区剣道連盟（東松山剣道連盟）」に名称変更しています。

昭和50年代には、埼玉県剣道連盟会長を務められた檜崎正彦先生（範士九段）の教えを乞うため、県内外から多くの剣道愛好者が現在の「青少年研修道場明德館」を訪れ、当連盟が大きく発展するきっかけになりました。その後も、全日本選手権大会や全日本女子選手権大会に出場する選手も数多く輩出しています。

また、当連盟の特徴的な取り組みのひとつに、小学生の強化稽古があります。令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により実施できませんでしたが、平成14年に開催された「第1回埼玉県剣道大会（小学生の部）」より継続しています。選手は、各加盟団体から預かった小学生が、7月から大会までの4か月間、週2回の強化稽古を行い、大会に臨んでいます。目の前の勝敗にこだわるのではなく、大会後にそれぞれの団体に戻って活躍してくれる人材育成を第一に考えています。昨年は、この強化稽古で巣立った選手が指導者として加わることになりました。少子化の影響で剣道人口も右肩下がりの状況だからこそ、次代を担う人材育成が求められているのではないのでしょうか。

今後も引き続き、先人から受け継いだ剣道を未来へ繋ぐ「一剣以興國」の志と檜崎先生の遺訓を心に留め、当連盟の取り組みはもちろんのこと、9つある西部地区内の連盟とも手を携え、埼玉県剣道の発展に邁進してまいりたいと存じます。



令和2年度前半期昇段者一覧

剣道7段

〈4月30日・京都〉
 峯田 尚道(浦和)

〈5月16日・愛知〉
 中尾 男平(東入間)
 薬師寺将二(高校)

〈8月29日・福岡〉
 瀨井 龍明(浦和)

剣道6段

〈5月17日・愛知〉
 伊藤 尚男(越谷)
 中村 嘉之(川越)
 大隈 正平(高校)
 山田 亘(高校)

〈8月30日・福岡〉
 鈴木 智琴(八潮)
 白倉 正悟(川口)

居合道7段

〈8月30日・京都〉
 藤村敬一郎
 鈴木 信夫

居合道6段

〈8月30日・東京〉
 杉山 伸和
 古屋 大樹
 高橋 修平
 山下太津美
 岩田 卓巳
 安澤 健則

居合道5段

〈10月・県立武道館〉
 大滝 成
 本田 佳次
 佐藤 俊郎
 森 秀夫
 宮崎 富裕
 古後 義也
 小山 邦雄
 桑川 修
 横田 正二
 森本 千晴
 宮崎いづみ

居合道4段

〈10月・県立武道館〉
 小川 貴弘
 松崎 隆文
 中澤 翔
 原田 将吾
 大塚 智之
 野澤 茂
 塩津 光春
 大井田親則
 平社 清治
 大島 伯一
 永島 孝行
 木村 公昭
 柴崎 僚子
 竹田 奈美

杖道5段

〈10月14日・県立武道館〉
 出口 正人

杖道4段

〈10月14日・県立武道館〉
 岡江 早月
 荒畑 久代

剣道教士

〈5月6日・京都〉
 関口 良男(春日部)
 尾崎 文昭(幸手)
 忍田 昇一(幸手)
 叶谷 英毅(行田)
 粟屋 聡(東入間)
 小佐野利通(東入間)
 河田 泰明(狭山)
 瀧内 健治(狭山)
 永井 敦(入間)
 鈴木 忠雄(川越)
 田原 美樹(飯能)
 塚本 哲(西入間)
 野牧 純(朝霞)
 森川 正純(浦和)
 本田 憲司(浦和)

並木 洋介(大宮)
 東 真澄(大宮)
 竹内 亨(小鹿野)
 平澤 貴文(警察)

剣道錬士

〈5月6日・京都〉
 田上 宏典(草加)
 井上 与一(越谷)
 中村 鈴男(春日部)
 野中 八郎(杉戸)
 川上 裕貴(杉戸)
 小澤征四郎(久喜)
 荒井 貴子(久喜)
 早乙女聡子(久喜)
 上野 進也(久喜)
 末木 健之(所沢)
 芳賀 信彰(川口)
 原田 和彦(戸田)
 佐藤 公也(朝霞)
 浅岡 宏二(朝霞)
 渡辺 良平(浦和)

池 祐一(浦和)
 長野 良昭(浦和)
 馬中 歩(浦和)
 村田 一彦(大宮)
 小林 竜也(北本)
 松下 時紀(熊谷)
 沖田 武巳(秩父)
 池野 智康(警察)
 関根 龍一(高校)
 小野 友栄(高校)
 小野 秀樹(高校)
 大場 千恵(高校)

居合道錬士

〈5月3日・京都〉
 長尾 宏

杖道教士

〈5月3日・京都〉
 永井 順子



編集後記

「剣風」第17号をお届けいたします。今号はCOVID-19(新型コロナウイルス感染症)の影響で、埼剣連の諸行事が令和2年度中はその多くが実施見合わせとなったために、記事内容の準備ができず、発行が大いに遅れてしまったことを深くお詫びいたします。いまだ、感染の終息にはほど遠い状況ですが、ワクチン接種も始まり、会員のご精武も例年の模様に近くなってきたと伺っておりますので、次号には従来の内容に近い記事をもって皆さまにお届けできると存じます。

そのような中でも、日頃お世話になっている埼玉県立武道館の羽鳥館長の巻頭言をはじめ、宮下理事による大保木輝雄埼玉大学名誉教授のご編著『日本武道の武術性とは何か』の紹介、藤牧進先生の「我が師を語る」(茂木光雄先生)、原義克先生の立教新座剣道部の紹介、東松山剣道連盟紹介「一剣以興國」など興味深い原稿をお寄せいただきました。危急の中でご執筆いただけましたことに深く感謝するとともに、発刊の遅れをお詫びいたします。

なお、現編集体制は今号をもって終了し、次号以降は新しく選出された理事のもとで編集委員会が編成され18号以降の編集にあたります。2期にわたって編集のとりまとめをされた川合育三副会長(広報部長)は今期をもってご勇退とのことで、名残惜しい限りですが、4年間にわたるご尽力に心より、お礼を申し上げ、今後の一層のご健勝、ご精武を念じております。(瀧澤)